

民俗博物館だより

Vol. 26 No. 2

2000. 1. 31



▲辻本忠夫氏が描いた紙芝居

目次

収蔵品展「くらし絵と昔の用具 —遊ぶ・楽しむ・学ぶ—」の展示紹介.....	1
収蔵品展にともなう調査 ただ一人の“紙芝居屋さん”の話.....	3
民俗資料の聞き書き短信④ 山辺郡都祁村小倉・上深川・下深川の「オコナイ」.....	4
民俗資料の聞き書き短信⑤ 吉野郡大淀町薬水の宮座.....	7
お知らせ.....	7

収蔵品展

「くらし絵と昔の用具—遊ぶ・楽しむ・学ぶ—」の展示紹介

期間 平成11年12月5日(日)～平成12年7月9日(日) 奥野義雄

今回の収蔵品展では、奈良県生駒郡安堵町で生まれ、育った故*辻本忠夫氏が描き続けてきた奈良県内、とくに安堵町および周辺の風景、「くらし」の中でいつも目にしていたさまざまな商いの光景、いろいろな遊び、楽しみなどの情景のスケッチ画のいくつかを「くらし絵」と呼称して紹介している。

とりわけ、「くらし絵」の中でも、さまざまな商いの光景と遊び・娯楽の情景は、いまではほとんど見る事ができないものが少なくない。*辻本氏は享年79才(1902年～1981年)

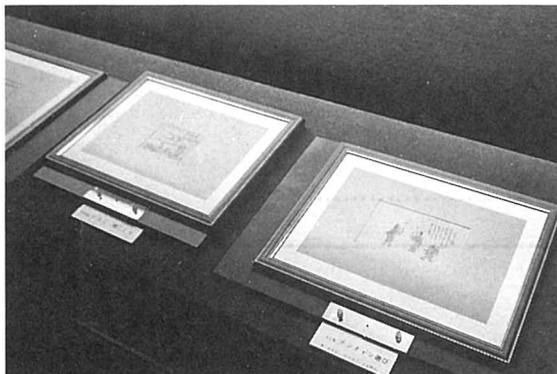
たとえば、大正時代と明記されているスケッチ画の一群から取り出した「くらし絵」の中の“商い”の光景には、

- ①ランプ屋
- ②カルメル(カルメラ)屋さん
- ③覗き屋さん(覗きからくり屋のこと)

などがある。また、同じ大正期と明記されている一群から取り出した「くらし絵」の中の“遊ぶ・楽しむ”の情景には、



▲辻本忠夫氏の描いた「くらし絵」—澁紙張り



▲辻本忠夫氏の描いた「くらし絵」の展示

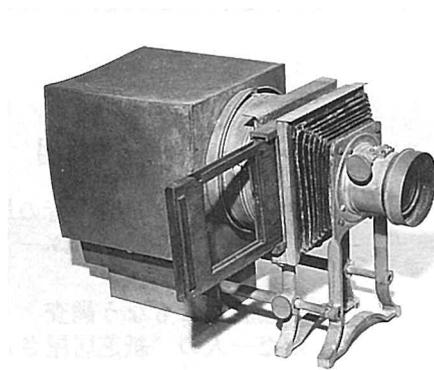
- ①だんございく
 - ②テンチャン遊び(お手玉遊びのこと)
 - ③ばいかち合い(ベイゴマあるいはバイゴマと呼ばれるコマの勝負の遊びのこと)
 - ④べったんの勝負(メンコと呼ばれる)
- などがあり、別の昭和前期の一群のスケッチ画には、

- ①雪足(竹馬のこと)
- ②イカあげ(タコあげのこと)
- ③いなごとり
- ④螺たにしひろい

などがある。

さらに、昭和前期のスケッチ画の帙ちっの一群には、“商い”の光景を描いたものがいくつかあり、その四・五を掲げると、

- ①紙芝居
- ②鑄掛け屋さん
- ③キャンデー売り
- ④研ぎ屋さん
- ⑤露店の曲芸師



▲幻灯機(当館蔵)



▲幻灯を見る様子

などがある。

これらのスケッチ画は、大正時代と昭和前期のものであるが、昭和後期のものもいくつかあるが、ここでは省略する。

故辻本忠夫氏が描き続けてきたスケッチ画の中の「くらし絵」以外には、安堵町内、奈良市内、川西町内、そして斑鳩町内の風景画や考古資料などの文化財の絵がある。

「くらし絵」に描かれた〈遊ぶ〉〈楽しむ〉〈学ぶ〉に関する情景とともに、昭和30年から昭和40年までに、くらしの中で使われていた実物の民俗資料を、今回の展覧会で紹介している。

たとえば、竹馬、お手玉、手まり、フラフープ（フラフーフともいう）、ベイゴマ、コマ〔各種〕、ままごと遊び用具、蓄音器、レコード盤（レコード入れの箱とも）、ラジオ、幻灯機、教科書などの用具を出品している。

これらは、すべて館藏品である。そして、出品する資料の大半は安堵町域を含む奈良盆地部のものである。

今回、展示で紹介している「くらし絵」と呼称した故辻本忠夫氏のスケッチ画と実物の資料から、大正期から昭和前半の〈遊ぶ〉



▲大峯山ののぞき



▲フラフーフ遊び

〈楽しむ〉〈学ぶ〉に関する〈くらし〉を通じて、昭和後半以後の〈くらし〉を思いおこしながら、どのように変わっていったのかということと、その変化は何によって引きおこされたのかを思い巡らす契機となればと考えている。

(1999年11月5日稿了)

収藏品展関連の催し物〔予告〕

■博物館講座■

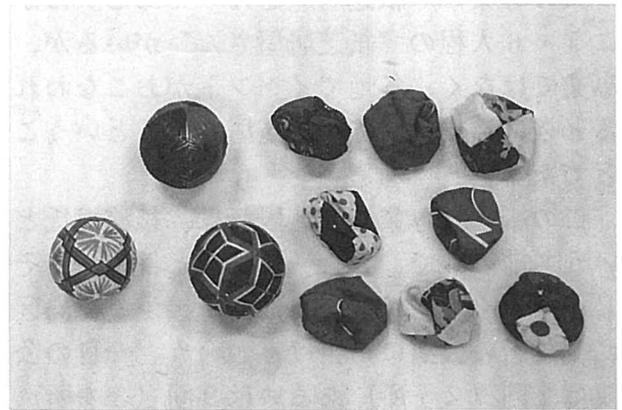
期 日：平成12年5月28日(日) PM1:30～

テーマ：消えゆく昔の遊び

・楽しみとその用具

講 師：奈良文化女子短期大学講師

原 泰 根氏



▲お手玉（右）と手まり（当館蔵）



▲ままごと遊び用具（当館蔵）

ただ一人の“紙芝居屋さん”の話

奥野義雄

元NHK大阪放送局勤務の知人から、大阪市内の紙芝居専門の紙芝居師を紹介されて訪れる機会に恵まれた。

知人の教えてくれた“紙芝居文化センター”をたよりにその紙芝居師を訪れて、紙芝居のことを聴くことができたので、以下に聞き取りの要点を述べていくことにしたい。

* * *

大阪市北区に住む紙芝居師は、全国でただ一人の専門の“紙芝居屋さん”である。ほかに5・6人程の“紙芝居屋さん”がいるが、専門ではなく、各地でイベントがおこなわれるときに名乗り出て、紙芝居をするということである。

この紙芝居専門の紙芝居師は、杉浦貞氏という名前の人で、毎日一祝祭日と日曜日、そして雨天を除いて一、北区と隣接する都島区に紙芝居の公演に出掛けるという。一日の公演は2回（2ヶ所）あるいは3回（3ヶ所）で、同じ場所に行く。一週間に一度、公演する場所一主に団地内の公園、公共施設そばの空地など一へ行くと、子供たちが公演時間の15～20分前から集まって、紙芝居師を待ちうけている。

1ヶ所の公演場所では、約一時間程滞在し、30分程は駄菓子を売り、20分程は紙芝居を二題とクイズを公演する。そして、紙芝居が終了すると、クイズに当たった子供の駄菓子を引き替え、再び子供たちが駄菓子を買求めるために、10分程その場所に居るといふ。

紙芝居の前に売られる駄菓子は、飛行機や舟、傘などの形のカタヌキ菓子、ヒョウタンの形のカタヌキアメ、水アメ、ウサギ（二枚のセンベイに水アメをはさみ、もう一枚を半分折って耳にしたもの）、そして天カス（二枚のセンベイに水アメをはさむ前に天カスをまぶしたもの）などである。

これらの駄菓子が、集まった子供50人程に売られるが、二度、三度と買求める子供も

いるという。

* * *

紙芝居専門の杉浦氏は、月曜日から土曜日まで子供たちと接する紙芝居の巡業をおこなう。日曜日と祝祭日は、大阪市外の公民館や市民会館などの催しに招かれて、紙芝居と子供の教育（家庭教育や学校教育）の在り方について講演するという。

招かれておこなう紙芝居では、新作のものが公演される。たとえば、「命のビザ」という長編の紙芝居は、第二次世界大戦中に日本人元外交官の杉原千畝^{ちうね}が、リトアニアで外務省の指示に反してユダヤ人難民に日本の通過ビザ（査証）を発行し、約6,000人のユダヤ人の命を救った実話をもとにしたものである。この「命のビザ」以外に、「ジョン万次郎」や「桜守之詩」の新作の紙芝居があるという。

現在、大阪に現役の専門の紙芝居師が一人で市内外で活躍しているが、紙芝居の全盛の時期（昭和30年頃まで）には、いわゆる“紙芝居屋さん”は全国で50,000人程いたという。しかし、昭和35年には2,000人程に激減していったということである。紙芝居屋さんの大巾な減少の大きな要因は、テレビの普及（この昭和35年には皇太子殿下と美智子妃〈現天皇陛下・皇后〉のご成婚式典のテレビ放映があった）によることと、高学歴志向による子供の塾通いが増えていったことを杉浦氏は挙げている。そして今日専門紙芝居屋さんとは同氏ただ一人になっているのである。

（1999年11月5日稿了）



▲専門の紙芝居師の紙芝居（大阪市内）

山辺郡都祁村小倉・上深川・下深川の「オコナイ」

浦西 勉

はじめに

1952年（昭和27年）奈良県教育委員会発行の『奈良県総合文化調査報告書（都介野地区）』に池田源太先生が、「都介野地方に於ける信仰生活の形態」を報告された。きわめて重要な論考である（この報告書は民俗編等含めてとても重要な論文が入っている）。この中に次の論考があり、「都介野地方に於ける仏教が民間の生業と関連する信仰に適応している点は、第一に此の地方の修正会の行事であろう」と示し、針の観音寺正月12日の「オコナイ」又は「初祈祷（はつきとう）」、「ダンジョウ」ともいう行事を詳しく紹介された。この論文に関心をよせて、都祁村の「オコナイ」を調査した若干の報告書である。1978年と1983年に行なったものである。不十分なまま報告するのは、このような都祁村の民俗文化の重要な要素に、少しでも多くの人々に関心を寄せてもらうべきだと思うからである。

都祁村小倉のオコナイ（附り：観音寺の年中行事）

都祁村小倉、観音寺にて行なわれるオコナイに関する、資料を紹介をする。

正月6日に行なわれているオコナイに使用されている記録2点である。1点目は、当日供える餅を華餅（ケヒョウ）とって、それを持ってくる人の名を記したものである。行事の途中で、各自の名前を読み上げることになる。2点目は、導師が使う法則である。

1. 華餅帳

長帳

昭和五十三年正月
御華餅帳
観音寺

奉献供

華餅一座

一座（村人の名前）

（末尾）奉献供華餅

哀愍納受当年

一歳御守護致シ

給ワン事

伏祈願奉ル云々

2. 修正会法則

昭和二十六年辛卯正月朔日

大和國山邊郡

壇之山々麓小倉庄

密林山於観音精舎

律師戒定

謹写ス

修正會法則

一 修正月導師作法

先唄師 尊居

取香呂金一丁

次 如來唄

次 散華

次 梵音

次 悔過 蹲踞

次 庄嚴帳（註：ショウゴンチョウと読む）

次 表白

次 華餅帳（註：1にあげた華餅帳を読みあげる）

次 懺悔 諸衆同音

乱聲

右以上初夜分

後夜作法 如右登禮盤

取呂丁

次 神名帳 次 勧請

次 三十二相 諸衆同音

次 御明之文

次 九条錫杖

次 牛玉加持 卯明等如常

次 經釋

次 乱聲

次 神名帳

結願法則

先祭文

次 錫杖 壺巻

次 心經 壺巻

次 陀羅尼任意

次 的射

右的ヲ射ルニ当リ先ヲ直スベシ

此ノ所ろヲ射ル

幣一本

鬼 幣一本導師座

幣一本

小倉、観音寺は村のほぼ中央に位置し、新義真言宗豊山派、本尊十一面観音である。脇仏に地藏菩薩・不動明王がまつられている。この寺院は、小倉村の人々にとって、きわめて大切な寺院である。正月のオコナイはもとより、その一年中にどのようなかわりがあるのか、一年間の行事を次に示す。

1月

6日 初祈祷・オコナイ

- 7日 三宝荒神の祈祷
札を各戸に配る。村人が重箱に、その1年の月の数だけ小餅を入れて持参。平年12個、ウル年13個。「荒神供法則」を使って祈祷をする。
- 2月7日 十万遍
15日 涅槃会
干団子を作る。
- 3月17日 観音講
観音経を誦読。各自は、ごちそうを持参して、食事。
- 3月彼岸 彼岸会
5月8日 花祭り 甘茶
6月16日 田の虫送り
松明に火をつけ、田の虫を送る。
本尊の灯から火を松明につけて、太鼓・鉦を叩いて、布目川の川上から川下へ行列をする。
- 8月盆 盆の施餓鬼。15日が多い。
24日 川尻の地藏を祀る。「康永元年七月日願主比丘頼円大工藤原利道」の銘文がある。
- 9月6日 行者講 夜、講員が集り、食事をする。
9月彼岸 彼岸
17日 観音講 ナンキンに目鼻を付けて供える。膳があり、赤飯・オカズ・ナンキンを供える。
- その他、毎月21日、大師講がある。不動・涅槃の掛軸がある。

都祁村上深川のオコナイ

ここでは、氏神八柱神社の境内にある薬師堂(『宗国史』による元楽寺か。)にて行なわれるオコナイについての聞き書きを示す。

- 2月7日 ハツキトウ ダンジョウ オコナイ
ショウゴンと呼んでいる。
- 14日 ヤナギノオコナイ コロコロ (川にある白い花) のヤナギ
- 7日のハツキトウには、ナリバナ (あるいはナ



▲オコナイ 導師と村人(都祁村上深川・薬師堂)
右端はナリバナ 1983年2月7日撮影(以下同じ)

リモチ)を作る。ナリバナとは、クロモジ(クロキともいう)の木の枝を三つ用意して、モチゴメ3合ずつ各家から寄せ集めて餅をつき、クロモジの枝に取りつけたものを言う。当番の家でナリバナを作る。クロモジは、ドウゲ役(村人の役割)の人が雪が降るまでに3本取ってくる。この行事の当番の家を当屋という。これは、秋の祭りの当屋と別である。当屋には、大当屋(1人)と当屋(2人)があり、この人達が6日に米3合集めて、2月7日ナリバナを午前中に作る。ナリバナは、モチがなるほど米が豊作になってくれという願いであるという。この時搗いた餅をそのまま、テイワイモチといって食べる。オコナイの供えものに、杉の板を作り、その上にトコロ、ウルシの木、ミカンを供える。午後、お寺に集まってダンジョウ、ハツキトウの行事を行なう。行事の前に、ホラガイ、太鼓を用意する。また、各戸から藁3把持参して、カンジョウナワを作る。準備が終わると、神野寺の住職さんが導師となって、オコナイ(ハツキトウ・ダンジョウ)を営む。村人によって、この行事をこのように呼ぶのは、行事全体はオコナイ・ハツキトウであるが、ダンジョウとはハゼウルシの木の枝を各自用意して、堂や床を打ち叩くことをいう。行事の途中にダンジョウ(乱声)というところで、ハゼウルシの木を打ち叩くのである。このハゼウルシの木にこの日祈祷した牛玉の札を挟み、モミマキの時に苗代に立てる。モミマキは、4月10日までにする。

この日は、当屋の人がご馳走を持って参加者の世話をする。作ったカンジョウナワは、村の川の上に掛けにゆく。カンジョウナワは、頭が1つ、尾を3つ、足を8つつけたジャ(蛇)であるという。

2月14日は、柳のオコナイという。この日は主に弓打ちを中心におこなうもので、青年、一人前と認められる男の弓打ちである。この弓打ちの的は、ネコの木を使用、それをフジツルで留めて紙を張り付けて鬼の字を書く。座の定めとして、座入り17歳で名付け(名替え)といって、秋の彼岸の道作り、長男5升、次男2升の酒を出して座入



▲ダンジョウ(「乱声」)をする村人(上深川)
竹筒(ホラガイ)をふいたり、太鼓をたたいたりする

りをする。また、4月16日、行者講で山上山へ参つて一人前と認めてもらう。

また、ヤナギのオコナイというのは、川の淵の川柳を取ってきて、この日の祈祷した札を付けて、それを行事終了後持って帰って、苗代に立てる。苗代の時、ツツジ・椿・イリゴメを同時に供える。この14日は、米の粉をこねて固くして、火で焼いたものをゴクさんといって食べた。また、ゴマメを炊き、大根も炊き、酒の肴にして食べる。準備は、当屋の仕事である。

当屋の記録に大正14年の当屋名を書いた次のものがあつたので記す。

大正拾四年

1月1日

旧正月 トーヤ

森田善二郎

浦西音五郎

石橋原太郎

正月十四日

田畑宇三郎

今北常蔵

祭日トヤ

徳谷歌次郎

山本伊之助

岡田忠年

中 四郎

ザイモクタテトウ

谷保太郎

酒肴

初回目

第二回目

第三回目

都祁村下深川のオコナイ

この地では、帝釈寺（新義真言宗豊山派）にてオコナイをする。かつて2回あつたが、今、2月10日のオコナイのみ。2回あつた当時のヤナギノオコナイ・イモノオコナイということばが残る。神野山の僧侶に来てもらって導師を勤めてもらう。ヤナギノオコナイは、柳の木で札を作る。また、



▲カンジョウ網を持って村中歩く（上深川）

的をこしらえて弓打ちも行なう。今は2月10日同じ日に行なう。

また、かつて、カンジョウ網を作り、モチ米なども供えたが、今はなくなった。この地に残る「修正会次第」を次に示す。

修正会次第

先禮盤 下取香爐 金二丁

台にのぼって拝む

三禮 立坐子三

次 着座 取香台金二丁

次 禮頌

次 神名帳

次 發願 金一打

次 四弘

次 云ニ乱上ト一 般若心經三卷一丁
今一卷

次 三十二相

次 導師打ッニ如意ニ金一丁

次 諷誦三打 次 發願一打

次 四弘

次 云ニ乱上ニ少し大声 次錫杖

次 廻向金二丁

次 三礼 如来唄 次表白 金一丁打
牛玉加持（註：ゴウオウカジという）

次 發願

牛玉持ソニコ（蹲踞）シテ加持

次 四弘

次 云ニ乱上ト一 牛玉加持

神野山の郷があり、それを山郷（「さんごん」という。箕輪・下深川・伏拝・堂前・大塩・助命・北野が山郷で、この地の修正会の導師は、神野寺の住職が勤めた。

（註）この調査には都祁村小倉 観音寺住職、山添村神野山 神野寺住職及び都祁村上深川・福山一義氏、同村下深川の前川善啓氏に話をうかがった。また上深川の森田正光氏、今上勝己氏、家舗長光氏には行事の撮影に多大のご協力を得た。感謝申し上げます。



▲カンジョウ網を吊る（上深川）

吉野郡大淀町薬水の宮座

浦西 勉

奈良県下では、神社の祭礼を宮座と呼ばれる人々によって営まれることが多い。かつて、吉野川筋の宮座の調査が、『奈良県総合文化調査報告書吉野川流域』（1954年）になされている。今、大淀町薬水の宮座を紹介しておく。もとより、聞きえたことのみで不十分である。

以下、永井真之氏に話をうかがったことについて記す。昭和45年（1970）頃までの話である。

氏神さんは宮ノ垣内にあり、八幡神社という。境内に宝暦7年（1757）の銘文を持つ灯籠がある。祭りは、10月15日であり、神主は2、3年前から吉野町上市奥の人が来るが、それまで、大淀町今木の神主に来てもらっていた。以前の秋祭りは10月9日が宵宮で10月10日が祭りであったようだ。宮さんを管理運営、祭礼をするための組織で宮座講がある。薬水の宮座講は、通称「座講（ざあこう）」といって、人は変わる事があっても、20軒は変化しない。餅座（もちざ）^{あん}といって、毎年のトヤ（当屋）に当たった家は小豆餡のドイライ（大きい）餅を作る。これを、昼と晩、トヤの家で、座講の人がよばれる。今日、アン餅とシロ餅を作る。宮座講は宮田（みやだ）を8畝持っており、トヤの家の人がそれを作る。

また、宮さんの上に宮山があり、これは村の山となっている。名義は、かつては宮総代の3人の名前になっていたが、最近、神主の名前となっている。

秋祭りは、先に述べたとおり10月14日（昔は10月9日）が宵宮。その時、村の下手（デアイ垣内）から五本の大きな12吊りの提灯を、若い衆がそろってかついで宮さんまで行くのだが、当時、その大きな提灯を一人でかついだが、今は2、3人でかついでいる。10月15日、祭り当日は、トヤの人が供え物を準備し、神社で祭典。祭典後、「御供まき」といって、餅をまき、村人がそれを拾う。

10月の祭り前の9月1日、八朔の前の晩に村人は、家族づれで氏神の八幡神社に集まる。ミヤゴモリといっている。村から1斗の酒が神前に供えられ、村人は各自ゴチソウ（ムスビ・サカナ他）を持ってきて、マエデンとかビシャモン堂の中などに座って食べる。マエデンとか毘沙門堂に入れなかったら、ムシロを持ってきて境内で食べる。暗いので、宮さんのぐるりやマエデンのぐるりへ提灯をつけた。酒などが入り興に乗ると、踊りもしたそうである。ほとんど夜明かしをした。

踊りは若い衆や所帯持ちの男子が浴衣やはだかになって踊る人がいた。踊りは、サイモンやゴウシュオンドなど、御所市朝町から音頭とりを雇ったそうである。豪勢な踊りだったようだ。永井さんは踊りが好きだったので、大淀町佐名伝や吉野口方面に踊りに行き、一晩あかしたものであった。翌日、それでも仕事は欠かさなかったという。

若い衆は、15、16歳頃から25歳と定まっていた。強制ではなく、頼みにゆくのだが、当時は百姓や山かせぎが主な仕事だったから、上の学校へもいかなかったの、ほとんどの人は若衆に入ったそうである。



▲八幡神社本殿（左）と毘沙門堂（大淀町薬水）

お知らせ

- 平成11年度収蔵品展
くらし絵と昔の用具
期 間 平成11年12月5日(日)～平成12年7月9日(日)
- 博物館講座
演 題 消えゆく昔の遊び・楽しみとその用具
講 師 原 泰根（奈良文化女子短期大学講師）
日 時 5月28日(日)午後1時30分～
募集定員 50名
応募方法 往復葉書
(一人一枚、住所・氏名・電話番号記入)
- 常設展
大和のくらしー農村・山村のくらしー
- ワークショップ 午後2時～
1月23日(日) 収蔵品展展示解説
3月11日(土) はたおり今昔

- 大和民俗公園内の古民家
18世紀から19世紀の奈良県内の特色ある民家を
移築復原
重要文化財2、県指定文化財4、未指定建造物
5、計11棟

奈良県立民俗博物館
〒639-1058 大和郡山市矢田町545(大和民俗公園内)
☎0743(53)3171
入館料 大人200円 大・高150円 中・小70円
開館時間 午前9時～午後5時
(入館は4時30分まで、民家は4時まで)
休館日 月曜日(休日の場合は翌日の火曜日)
交通機関 近鉄郡山駅、奈良交通バスターミナル①のりば
JR郡山駅 から乗車、矢田東山下車徒歩7分